



|              |                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 複数観衆状況における自己呈示に関する社会心理学的研究                                                                                                                                                                                                                                                        |
| Author(s)    | 笠置, 遊                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| Citation     | 大阪大学, 2012, 博士論文                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| Version Type |                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/59324">https://hdl.handle.net/11094/59324</a>                                                                                                                                                                                               |
| rights       |                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

|            |                                                         |
|------------|---------------------------------------------------------|
| 氏名         | 笠置遊                                                     |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(人間科学)                                                |
| 学位記番号      | 第25297号                                                 |
| 学位授与年月日    | 平成24年3月22日                                              |
| 学位授与の要件    | 学位規則第4条第1項該当<br>人間科学研究科人間科学専攻                           |
| 学位論文名      | 複数観衆状況における自己呈示に関する社会心理学的研究                              |
| 論文審査委員     | (主査)<br>教授 大坊 郁夫<br>(副査)<br>教授 釘原 直樹 教授 日野林俊彦 准教授 佐々木 淳 |

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、複数観衆問題のメカニズムを解明し、包括的な複数観衆問題解決プロセスモデルを提示することである。

従来の自己呈示研究の多くが、従来の自己呈示研究は、主として2者間コミュニケーションを対象としてきた(e.g., Leary & Miller, 2000)。その一方で、日常のコミュニケーション場面においては、自己呈示相手である観衆が複数存在することも多い。その1つとして、Fleming (1994) は、複数観衆問題を挙げている。複数観衆問題と、異なる印象を与えたい2人以上の観衆が同じ場面に存在するとき、人はどの観衆に合わせた自己呈示を行えばよいのかというジレンマに陥るといった問題である。人々が、日常的にこの問題に頻繁に直面する(Van Boven et al., 2000)にもかかわらず、日常的なコミュニケーション場面で生じる複数観衆問題のメカニズムに関してはほとんど検討がなされていない。複数観衆問題に直面すると、うまく自己呈示を行うことができない。自己呈示の失敗は、自尊感情の低下や、相手との関係崩壊につながる(Baumeister & Leary, 1995)。

では、複数観衆問題に直面したときに、どのように行動すればよいのであろうか。本論文では、人々が自己呈示の失敗を予測すると、他の次元で自分を肯定的に呈示して対処するという補償的自己高揚呈示(Baumeister & Jones, 1978)に着目する。そして、複数観衆問題に直面したときに、対処行動として補償的自己高揚呈示を行うことが人々の個人内および個人間の適応につながるかどうかの検討を行い、最終的に、複数勧誘問題の包括的な解決プロセスモデル提示を試みる。

## 観衆の性質が自己呈示に及ぼす影響(第2章)

第2章では、自己呈示の実験的検討に注目し、観衆の性質が人々の自己呈示に及ぼす影響について検討した。従来の研究では、主にシナリオ法が用いられてきており、実際の参加者の行動に着目したものは少ない。参加者の自己報告は、実際の行動と乖離する可能性が大きい(久保, 1998)。第2章では、従来の研究で得られてきた結果について、参加者の

自己報告に加え、第三者による参加者の行動評定による客観的なデータ分析を試みた。その結果、参加者の自己報告による自己呈示動機、および第三者による自己呈示行動評定双方において、異性関係に特に重要である外見的魅力についての自己呈示動機は、同性よりも異性と話すときの方が高くなり、有能さや社会的望ましさ、個人的親しみやすさなどの異性関係に特に重要ではないと思われる次元においては、相互作用相手の性別による影響は見られないことが示された。以上の結果から、人々が、相互作用相手との関係に重要な特性については自己高揚的自己呈示を行い、関係に特に重要でない特性については自己確証的自己呈示を行うという、シナリオ法を用いてきた先行研究の結果の妥当性を示した。複数観衆問題とパーソナリティ特性との関連(第3章)

第3章では、自分のおかれた状況や相互作用相手によって自分を変化させる傾向を示す、セルフ・モニタリングと自己複雑性という2つのパーソナリティ特性に着目し、複数観衆問題との関連を検討した。まず、セルフ・モニタリング得点の高い人、および自己複雑性の高い人は、複数観衆問題に直面する回数が多いことが明らかになった。さらに、セルフ・モニタリングおよび自己複雑性の高い人は、日常生活の中で頻繁に複数観衆問題に陥っているため、そういった状況に慣れていて、解決する自信を高く報告することが分かった。複数観衆状況での自己呈示(第4章)

第4章では、異性に対する自己呈示場面に同性の他者が存在するという、日常的なコミュニケーション場面において生じる複数観衆問題を検討するために2つの研究を実施した。分析の結果、複数観衆問題に直面した参加者は、異性に対して外見的魅力を積極的に呈示することは、同性の他者にネガティブな印象を与える可能性が高いため、控えた。その代わりに、異性と同性両方の観衆に対して好ましい印象を与えることのできる、社会的望ましさと個人的親しみやすさに関して積極的に自己呈示を行うことが示された。これらの結果から、複数観衆問題に直面した人々は、補償的自己高揚呈示を行うことが明らかとなった。複数観衆問題の解決法としての補償的自己高揚呈示(第5章)

第4章の結果を受け、複数観衆問題に直面した際に補償的自己高揚呈示を行うことが、複数観衆問題の解決につながっているのかどうかを、呈示者の個人内適応と、呈示者と相互作用相手との個人間適応に着目し、検討を行った。その結果、複数観衆問題に直面しても、その場に居合わせた観衆全員に対して共通して呈示することのできる特性があれば、補償的自己高揚呈示を行うことができ、それによって、呈示者自身の自尊感情の低下や自己制御資源の量の減少といった個人内不適応の防止、さらには観衆に対するネガティブな印象伝達の防止という個人間不適応も防止できることが明らかとなった。

## 総括

本論文では、複数観衆問題の生起メカニズムおよび解決法の検討を行った。本論文の意義としては、複数観衆問題という、外部に存在する他者がコミュニケーションに影響を及ぼすプロセスに着目し、2者間に焦点を当ててきた自己呈示研究の知見を拡張した点が挙げられる。また、複数観衆問題に直面した際に補償的自己高揚呈示を行うことが、呈示者の個人内適応、さらには呈示者と観衆との個人間適応につながることを明らかにした点は、理論的および実践的観点から非常に意義深いものであると思われる。

今後の展開としては、共通特性の無いときの対処行動の検討などが挙げられる。また、

「SNS疲れ」と呼ばれる社会的問題となっている、ネット上で生じる複数観衆問題のメカニズムおよび解決法の検討も求められるであろう。また、本論文で得られた知見は、実際のコミュニケーション場面で生じる複数観衆問題による不適応の軽減や、適切な対処行動を取るために必要な社会的スキルのトレーニングといった実践場面に応用可能であろう。

我々の生活している社会は、複雑化し続けている。それに伴い、われわれが所属する社会的な集団や関係、もしくは自分の持つアイデンティティの数は増加し、その属する集団や関係によって、相手に提示する自分の側面を変化させなければならない必要性が増している。本論文で明らかにした複数観衆問題の生起プロセス、およびその解決法は、こうした社会の中で適応的に生活していく上での一助となるであろう。

### 論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、当事者が異なる印象を与えたい複数の他者が同じ場面に存在するときに陥る自己呈示のジレンマである、複数観衆問題の発生からその結果に至る包括的な複数観衆問題のプロセスモデルを提示することである。

複数観衆問題は、日常的に多くの人々が直面する性質の社会的事象である。しかし、この複数観衆問題のメカニズムに関してはほとんど検討がなされていない。複数観衆問題に陥り、自己呈示に失敗すると、自分にとって望ましい印象伝達をすることができず、自尊感情が低下したり、相互作用相手との関係が崩壊してしまいかねない。この研究は、複数観衆問題に直面したときにどのように行動すれば適応的であるのかを対人的自己の観点から検討したものである。即ち、対処行動として補償的自己高揚呈示を行うことが、人々の個人内および個人間の適応につながるのかどうかの検討を行い、最終的に、複数観衆問題の包括的な解決プロセスモデル提示を試みている。これは、わが国では初めてこの問題を実証的に研究したものであり、大方の注目を集めた研究と位置づけられる。

具体的には、1) 観衆の性質が人々の自己呈示に及ぼす影響について検討した実験的検討、2) 自分のおかれた状況や相互作用相手によって自分を変化させる傾向を示す、セルフ・モニタリングと自己複雑性という2つのパーソナリティ特性に着目し、複数観衆問題との関連を調査法によって行った検討、3) 異性に対する自己呈示場面に同性の他者が存在するという、日常的なコミュニケーション場面において生じる複数観衆問題を検討するために2つの実験的検討を行っている。

これらの検討結果を受け、複数観衆問題に直面した際に補償的自己高揚呈示を行うことが、複数観衆問題の解決につながっているのかどうかを、呈示者の個人内適応と、呈示者と相互作用相手との個人間適応に着目し、検討を行った。その結果、複数観衆問題に直面しても、その場に居合わせた観衆全員に対して共通して呈示することのできる自分の特性があれば、補償的自己高揚呈示を行うことができ、それによって、呈示者自身の自尊感情の低下や自己制御資源の量の減少といった個人内不適応の防止、さらには観衆に対するネガティブな印象伝達の防止という個人間不適応も防止できることを明らかにしている。

そして、対人状況、当事者のパーソナリティ、複数観衆問題（状況）における観衆の重要性、そこで共有できる自分の特性（話題）を勘案し、具体的な対処行動内容、それにつながる適応、不適応のプロセスモデルを提唱している。

本論文の研究結果、考察は説得力のあるものであり、得られた成果および申請者の研究への取り組みから、今後のさらなる研究展開が十分に期待されると考えられる。精緻に論理的に展開され、多くの研究によって構成された本論文は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。